

---

# 絵筆

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絵筆

### 【著者名】

ZZマーク

### 【あらすじ】 並盛りライス

受験を来年に控えた葉は進路が決まらない。弟の描いた絵に、忘れていた絵に対する気持ちに心が揺れる。

火葬場の煙はいつも上に昇つていく。  
決して低い所に留まらないのは、死者が空を田指すからだらうか。  
まっすぐに昇つていく白い煙を見ながら葉は思った。  
この町には高い建物はない。だから一番高いのは火葬場の煙突なんだ。  
  
空に最も近いその場所が、葉の住む家からはよく見えた。  
葬式がある日は白い煙が、迷う」となく一筋の線となる。  
それは、大きな線香のようだと、いつも葉は思う。  
来年に大学受験を控えた葉は、勉強も手につかず、空を見ていろることが多くなった。  
大学に行きたいのかどうかも分からぬ。  
けれども、他にやりたいことなんてなかつた。  
中学から始めた美術部も、高校に入つてからは技術が足りないことを理由に辞めた。  
本当は絵を描きたいのだとに言えたらどんなにか楽だらう。  
しかし、葉は自分の才能には見切りをつけていたし、ズルズルと絵を描き続けたいとは思わなかつた。

シャープペンシルを握った右手が筆を持っていた右手よりも重い。

差した西田に目を細めていると急に部屋の扉が開いた。

「おい、葉。ちょっと来てみなよ」

薄い無精髭に手をあてた父が葉を呼んだ。

葉がついていくと、今年小学校に入った弟が誇らしげに何かを机に置いた。

父が指しているのは、クレヨンではなく、ちゃんとした絵筆で弟の描いた蝉の抜け殻だつた。

形はぎこちないが、見ていて蝉だと分かる。

それに、色使いが綺麗だった。

親馬鹿な父が

「額に飾るか

と真顔でいった。

「もう夏なんだなあ」

と僕は言った。

弟がキヨトソとした顔をした。

純粋に羨ましいと思った。描きたい絵を描くことができる。

弟は、何かを待つように葉を見た。

「お前はスゴいよ。美術部だつた俺が保証する。」

嫉妬ではない、ただ誰かに誉められたくて絵を描いていた訳でもない。

でも、何か胸につっかえるものがある。

弟は、蝉の抜け殻を葉に見せてくれた。

不意に、父が言った。

「そりゃいえ、葉が佳作とつた時も同じように飾つたよな」

小学六年の時、たつた一回きりの佳作をとつた。今見れば、とても作品と呼べるものではなかった。

たつた一回の栄光が、葉が絵を描く動機だった。

弟が見たいと言つたが、葉は覚えていた。

中学三年の時、あの絵は燃やしたのだ。絵との決別。

炎の中で、沢山の絵と一緒にチリになつていった。

葉の絵は真っ白い煙になつて高く高く昇つていき、やがて消えていった。

父が満足そうに弟の絵を額に入れた。

「何處に飾る?」

葉は思い付いて言った。

「ここの窓の側なんてどう?」

窓の外では、白い一本のラインが空に向かっている。葉は、夏までに進路を決めようと思つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7237a/>

---

絵筆

2010年11月7日08時17分発行